

令和三年度入学試験問題 国語（五十分）

二月一日（午前） 実施

〔注意〕

- 一、試験開始の指示があるまで問題を開いてはいけません。
- 二、問題冊子は17ページあります。試験開始後すぐに確かめてください。
- 三、解答はすべて解答用紙に記入してください。
- 四、問題冊子の表紙及び解答用紙に受験番号（算用数字）と氏名をはっきり書いてください。
- 五、字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。
- 六、試験終了後、解答用紙のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってください。
- 七、試験中、机の上から物を落としたり、気分が悪くなったり、何か用ができた時は、手をあげて監督かんとくの先生に知らせてください。

受験番号

氏名

東京女学館中学校

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ここは、道幅みちばたの狭いせま町の端はしれでありました。骨董屋こつどうがあり、古本屋こほんがあり、豆腐屋とうふがあり、焼芋屋やきいもなどの小さな家がありました。その前を通とつて突き当たると、石段いしがたがあつて、崖がけの上に一軒いっけんの古い家があり、家の前に大きな銀杏いちょうの樹きが聳そびえていました。その古い家の主人は、独り者のお婆おばあさんで、二人の年若い姉妹あねいもうとに室へやを貸していました。この姉妹たちは、夏の初めはつごとの頃ころどこちらか移うつつて来たのです。早くから両親りやうしんに別わかれて、誰だれに頼たよるものもなく、この世の中の苦しみや喜びを語り合うのにも、二人より他ほかになつたのであります。

二人は、それぞれ仕事を持ち、姉はある工場へ行つて働き、妹の方は、店の売場へ勤めていました。朝は共に家を出て、晩方は前後して崖の家へ戻もどつて来ました。二人は、同じ亡なくなつた母の腹から生まれ、至いたつて仲の好い間柄がらであつたけれど、性質しやうばかりはどうすることも出来ませんでした。姉は、どちらかといえは、現実げんじつ的で、ときばきと物事を片付けて行く風でありましたが、妹の方は、空想的で、何に對しても、見えないものをも魂たましいで感ずるという風でありましたから、暇ひまがあれば、本を読んで楽しんでいたのであります。姉の健康けんこうなのにくらべて、妹は、体が弱よわかつたのでした。しかし勤めを休まずに精を出していましたが、秋の頃からは、眼に見えて衰おとしろへはじめたのであります。

①「もう、お店の方は休むのがいいのよ。私があんたの分も働くからね。」と、姉は、妹をいたわりました。「それでは、姉さんにすみません。」と、気の弱い、妹はいつたのでした。

「また、達者になつたら働けばいいから、何も考えないで休んでいらつしやい。」と、姉はいいました。

妹は、なんで自分は、こんな弱い体に生まれて来たろう？ と、自分の体を口惜くちやくしく思わずにいられたのでした。彼女は、よく勤めの帰りに古本屋へ立ち寄つて、いろいろの本を求めたのでした。その中には、お伽噺おとぎばなしの本もありました。

このどこの国のことを書いたとも分からない本の中には、鳥や、木や、犬などの生活も書いてあつて、またお姫様ひめさまが、魚になつたというような話も書いてありました。

「私も、こんな弱い体にいるよりか、魚にでも、鳥にでも、早く生まれ変わつて来たなら、どんなに愉快ゆかいでしょう。」と思つたのでした。

また、ぼんやりと、窓から町の空に浮かんだ雲を見て、

「人間は、死んだら何処へ行くだろう？ 私は、あんなような雲に生まれ変わって来たいものだ。」と、眼に涙をためて考えました。

町の中にも、蟋蟀の鳴声がきこえるようになった頃でした。妹は、寝ている日が多くなりました。ちょうど姉のいる日のこと、診ている医者が帰りに姉を別室へ呼びました。その暗い医者の顔付きは、姉にある不安な予感を与えました。

「妹さんのお命は、来年の春までしか持ちません。」と、果たして、医者はいったのでした。

思えば夏の盛りの頃であった。庭へ出て涼しい風に吹かれた時、姉は、頭の上に黒々として繁った、銀杏の樹を見て、この沢山の元気のいい青葉が、やがて黄色くなつて、みんな散つてしまふということが、なんだかあり得ないことのような気がしたことがあった。それと同じく、この世の中で、ただ自分の一人の妹を奪われる日が来ると考えられようか？ もしもそんなことがあつたら、私は、どんなに悲しかろう……気が狂うかもしれないと思つたのでした。

「私は、ありたけの力で、死と戦つて、妹を助けなければならぬ。それより他に、如何なる途があるう。」

こう思つた姉は、工場で働いて家に帰ると、夜は、手内職に編物をして、少しでも金を取ろうとしました。(A)、彼女は、朝早く弁当を持って、出かける時に、妹の枕許に坐つて、

「晩方帰る時に、おいしいものを買つて来て上げるから、あたたかにして、風邪を引かぬように待っていていらっしやい。」と、いつて、なぐさめたのでありました。

姉は、家に残つて、自分を待っている妹のことを考えると、常に帰りを急ぐようになりました。崖の上の、大きな銀杏の樹は、遠くからもその姿が望まれたのです。いつしか、その銀杏の葉が、黄金色に、夕日に燃えて見えるようになりました。

(B)、風が吹くと、さながら炎のように、ひとしきり空へ高く舞い上がつてから、さらさらと下へ散つて行くのを見ました。

姉が、留守の間に、妹は、しばらく行かなかつた、古本屋を思い出しました。なにか珍しい本はないか知らん。(C)人

間が死んでから、行く先の世界が分かるような本があつたら、どんなに面白いだろうと思ひました。彼女は、石段を降りると町へ出ました。この春まで、駆けて登つても息切れ一つしなかつた、五六段ばかりのものが、こつとも疲れるものかと歩きながら感じたのでした。

古本屋には、顔馴染みの老人が外を向いて坐っていました。

「しばらくお見えにならぬと思いましたが、それはそれはご病気でございましたか。朝晩、大分寒くなりましたからお大事になさいまし。あなたのおっしゃるような本は、ちょうどここに、三世相といましてな、人間の過去から、未来のことが書いてある本がございますが、これは、今の若い方にはどんなものですか。……私共が読んでは、たいへん面白いご本でございますけどな……」

と、いいました。妹は、その赤い表紙の部厚な本を手にとって開いて見ましたが、不思議ないろいろの絵などが入っていて、ちよつとお伽噺の本のように、すぐに、すなおに頭の中へ入るような気はしなかつたのです。

「何か他にお伽噺の本は、ございませんか。」と、三世相をお爺さんに返してききました。

「みんなこの節出来た子供だましのばかりで、面白いものはございませんが……」と、老人は、いいました。

彼女は、仕方なく家へ戻ってまいりました。窓から、町の屋根を越して、西の空に沈む赤い夕日をながめていました。それを見るのが、どんなに楽しいかしれない。さまざまのことが頭に浮かんで来るからです。それから、また、お姫様が、魚になつた話を書いてある、お伽噺の本を出して見ました。

魔法使いのお婆さんに頼んで魚にしてもらつたお姫様は、美しい海を泳いで、魚になつて、毎日楽しい日を送っている。すると、ある日無慈悲な漁師の網にかかつて、もう少して殺されようとしたのを、情け深い皇子様に助けられる。魚は、魔法を解かれて、二たび綺麗なお姫様の姿となる。(D)、二人は、美しい海を渡つて、誰も知らない島で暮らすというのでありました。「こんな本の中にさえ、これ程、人を喜ばしたり、悲しませたりする不思議な力が宿っているもの、なんであの雲の中に、美しい魂の生活がないといえよう。私は、死んだら、きつとあの雲の中のお母さんのいらっしやる所へ行くことが出来るのだ！」妹は、そんなことを銀杏の落葉のふりかかる窓の下で思っていました。

その時、姉の石段を上つて、門を開ける音がしたのでした。

古本屋のお爺さんは、ここへ来たあの娘が、もう来年の春までしか持たない命だと人から聞いた時に、いまさら運命というものについて考えさせられたかしれません。同じ町に住む豆腐屋や、焼芋屋や、建具屋が、朝から夜まで働いても、不景気をかこつ中に、八百屋独りが金を残したとか、平常は遊んでいる骨董屋が一双の古屏風で、幾千円かの金を儲けたときいた時にも人

冴えたかがやきが見えたのであります。

「眼に見えない、分からないことというものは、信ずるより他に方法のないものですよ。」と、お爺さんがいいました。

「私は、うれしいの。」と、娘は、幾たびもお礼をいって、帰って行きました。その後、間もなく、焼芋屋から出火をして、お爺さんの古本店も焼けてしまえば、お爺さんの行衛ゆくえも分からなくなってしまったのでした。

「お姉さん、私は、死んだら、この次の世にも女となって、いいお家へ生まれ変わって来るときいたの。」と、妹がいました。

「誰が、そんなことをいったの？」と姉はびっくりしました。

「古本屋のお爺さんが、何かの本を見ていったのよ。」

「あんた、それを信じる？」

「ええ、私、信じるのよ。早く死んで達者になって生まれ変わって来たいわ。」これをきくと、姉は、眼の中をうるませました。

「私が、一人になって、かわいそうとは思わないの？」

と、姉は、怨めしうらそうにして、妹を見ました。

「私が、あんたをどれ程思っているか分かっているでしょうに？」

と、姉は、いいました。

「それは、分かっているわ。しかし、お姉さんに心配をかけるばかりですもの。私、達者な体に生まれ変わって来たらと思うのよ。しかし、どこに生まれるか分からないし、お姉さんということも知らないでしょうね。」と妹は、急に悲しそうな顔付きをしました。

「それは、同じ国の中ですし、国中の者は、みんな姉妹も同じことなのだから、どこで働くということも、誰のために働くということもないじゃありませんか。」と、姉は、妹を力づけました。

「そうね、私も、狭い考えを捨て、大きくなったら、そういう気持ちで働くわ。」と、妹がいうと、

「まあ、もう死んでから先のことをいっているの？」

と、快活な姉は、朗らかに笑ったのでした。姉は、少しでも多く働いて、妹の滋養になるものを食べさせようと思いました。

窓の外の景色は、全く冬らしくなりました。姉は、医者いしやの言葉を思い出すと、この冬が去って、花の咲く春になるのが怖ろし

いような気がしました。

その冬もだんだん経^たって、春へと近づいて行きました。明るい町の灯は、窓の硝子戸^{がらす}を透^{とお}して、輝^{かがや}いて見えたのであります。「お姉さん、もう春が来そうなのね。あたたかなので、戸をおそくまで開けていると見えて、町の灯が大変に美しいのよ。」

ひとり、妹は、喜んでいました。姉は、妹のこんな言葉をきくと、身を切られるような思いがしました。そして、心では泣きながら亡き母の魂^{たま}に祈^{いの}っていました。

* * *

五六十里も距^{へだ}たった、彼方^{かなた}の町でした。そして、季節は、もう春でありました。道路が拡張されるので、家を取り払^{はら}われた跡^{あと}のところでもあります。晩方になると、いろいろな屋台店が出たり、露店^{ろてん}が張^ひられたりしました。一つは、気候が次第によくなるので、自然人々は家にいられず、出歩くからでありました。

いつ頃からともなく、其処^{そこ}へ老人の易者が出て、通行人の足を止めていました。易者は、人相を見、手相を見、さらに、その人達の過去から未来の運命も見るといので、不思議がられていました。いうまでもなく、古本屋のお爺^{ひょうはく}さんが、遠くこの町へやって来たのであります。

ある日のこと、カフェーの軒^{のき}に赤や青の灯のついたばかりの黄昏^{たそがれかた}方でした。一人の労働者風の元気のいい若者が、手に白い花の咲いたヒヤシンスの鉢^{はち}と、何かの紙包みをぶら下げて、ほろ酔^よい機嫌^{きげん}でここへやって来ました。

「どれ一つ、おれの運勢を見てもらおうか？」

そういつて、お爺さんの前に立ちました。

お爺さんは、誰にもするよう^{ねんれい}に、年齢^{ねんれい}をきき、生まれた月日をききました。それから天眼鏡^{てんがんきょう}を取り上げて、若者の顔と手の相を見ました。

「あんたは、仕合せ者じゃ。」と、まずこういいました。

「それにちげえねえ。」と、若者は、大きくうなずきました。

「しかし、ただ一つ苦勞がある。それは、まだ子供が生まれないことだ。どうだな、当たったろう？」と、お爺さんはいいました。

「よく当たる。どうして、それが分かるのかね。」と、若者は、いつか真面目まじめになつてきました。

「この鏡一つで、私には、前世のことからすべて分かるのじゃ。」

「どうして、そんなことが分かるのかね。」

⑪「大空に見えたり、消えたりする無数の星の歩く途みちがきまつているようなものじゃ。」

「結婚けっこんしてから三年になるが、まだ子供がない。いつ生まれるだろうかね。」と、若者は、たずねました。すると、お爺さんは、落ちついた調子で、

「心配は、いらぬ。いま、遠い西の国に、やさしい、美しい娘さんがいるが、この人はその土地の水が性に合あわないうばかりに、こちらへ生まれ変わつて来ようとしている。ただ、一人の姉が、親切をつくして、引き止めているという風だが、この春うちの中に、腹の内へ宿るから、生まれたら、可愛がつてやんなさい。そして、立派な人に育てておやりなさい。」と、お爺さんは、いいました。

若者は、夢を見るような気持ちで、きいていました。

「おら、きつと大事に育ててやるよ。できることなら、その姉という人のいる所が分からないものかな。」と、いいました。

「その姉さんは、仕合せに暮らすから、その必要がないのだ。」

若者は、ヒヤシンスの鉢かを抱かかえるようにして帰つて行きました。

⑫その後ろ姿を見送りながら、お爺さんは、人に喜びと希望を与えて、自分も何か生まれてきた甲斐かひがあつたような感じがしたのでした。うす霽もやのかかった町には灯がついて、すべてのものの芽ぐむにふさわしい春の晩でありました。

(小川未明「灯のついた町」より)

※出題の都合上、表記のしかたを変えたり省略したりしたところがあります。

問一 — 線①「それでは、姉さんにすみません」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 私が勤めを休んでしまったのは、姉さんに迷惑がかかってしまいました。

イ 私の分まで姉さんに働かせてしまったのは、姉さんに申し訳ありません。

ウ 姉さん一人をお店に行かせてしまうなんて、私の気がすみません。

エ 私が勤めに行けなくなってしまったって、姉さんにはお詫びのしようもありません。

問二 — 線②「果たして」の本文中での意味として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア いったい

イ まことに

ウ とうとう

エ きゆうに

問三 空欄(A) (D)のうち、一つだけ他と違う語が入るものがあります。

(1) その記号を答えなさい。

(2) また、(1)で答えた空欄に入る語を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア そして

イ たとえ

ウ いっぽう

エ もし

問四 — 線③「人間が死んでから、行く先の世界がわかるような本」として登場する具体的な書名を本文中より抜き出して答えなさい。

問五 — 線④「子供だましのもの」について後の問いに答えなさい。

(1) 本文中での意味を二十字以内でわかりやすく説明しなさい。

(2) 「子供だましのもの」の具体例といえるのはどのような内容の話だと考えられますか。本文中より十字以上二十字以内で抜き出して答えなさい。

問六 — 線⑤ 「いまさら」の本文中の意味として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 今となってはもう イ 今改めて ウ とりわけ エ 手おくれになって

問七 — 線⑥ 「小春日の温かな日」があらわす季節として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 春 イ 夏 ウ 秋 エ 冬

問八 — 線⑦ 「この方」とは具体的に何を指しますか。本文中から一語で抜き出して答えなさい。

問九 — 線⑧ 「姉は、眼の中をうるませました」とありますが、この時の「姉」の気持ちの説明として最も適当なものを次の

中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ついこの間まで死を覚悟かくごしていた妹が、生きようという希望をもってくれたことに感激したから。

イ 自分の人生がそう長くないことを悟さとった妹に返す言葉がなく悲しみがこみあげてきたから。

ウ 妹をうしなう悲しみとともに、簡単に自分をおいていこうとする妹に憤いきどおりをおぼえたから。

エ 一般いっぱんには考えにくい生まれ変わりのことまで考え、健康な再生を信じる妹に違和感いわかんを覚えたから。

問十 — 線⑨ 「朗らかに笑ったのでした」の気持ちの説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 死後のことにせよ、以前よりも明るく前向きな妹の発言に胸をなでおろしたから。

イ 力の入った妹の言葉を聞き、もしかしたら妹を助けることができるかもしれないという希望をいただいたから。

ウ 来世を信じきっている妹の気持ちを折ってはならないと気丈きじょうにふるまおうと努めたから。

エ 妹の思いに同調し、生まれ変わったあとの丈夫じょうぶな体での人生を応援おうえんしようという気持ちになったから。

問十一 — 線⑩ 「亡き母の魂に祈っていました」とありますが、姉はどのようなことを祈ったと考えられますか。「妹が……ように。」という形で二十文字以内で答えなさい。

問十二 — 線⑪ 「大空に見えたり、消えたりする無数の星の歩く途がきまっているようなものじゃ」とありますが、ここで「お爺さん」はどのようなことを言おうとしているのですか。三十文字以上四十文字以内で説明しなさい。

問十三 — 線⑫ 「お爺さんは、人に喜びと希望を与えて、自分も何か生まれてきた甲斐があったような感じがした」について、後の問いに答えなさい。

(1) 「お爺さん」の元の職業は何ですか。本文中より一語で抜き出して答えなさい。

(2) 「人に喜びと希望を与え」とありますが、「お爺さん」は例えばどのようなことをしたのですか。具体的に二十文字以上三十文字以内で二つ、答えなさい。

問十四 次の各文のうち、本文の内容として正しいものには○、誤っているものには×を答えなさい。

ア この作品には、夏から翌年の春までの約一年間が描かれている。

イ 二人の若い姉妹は、両親と住んでいた一軒家を出て、町はずれのとある神社のそばの下宿に移り住んだ。

ウ 妹は、姉と住んだ町から遠く隔たったかなたの村で、一人静かに息をひきとった。

エ 姉妹の住んでいた古い家のそばの商店街は、ある年の冬一軒の店から出火して数軒消失してしまった。

オ 本の好きな妹は、古本屋の主人に勧められ、人の過去から未来のことが書いてある一冊の本を購入した。

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

知的活動には三つの種類が考えられる。

既知きちのことを再認する。以下、これをAとする。未知のことを理解する。これをBとする。まったく新しい世界ちようせんに挑戦する。これをCとする。

① これを読むことに関係づけて考えると、すでに経験して知っていることが書かれている文章を読んでわかる 때가Aに当る。よく知っている土地のことを書いた文章を読んだり、実際を見て知っているスポーツの試合についての記事を読んだりするとき、その理解はこの再認になる。

読む側に、知識あるいは経験が先にある。そのあとから、同じ、ないしはよく似た知識があらわれる。両者を関係づけなければ「わかった」という自覚になる。最も基本的な認識の形式であるけれども、これだけでは既知のことしかわからなくなってしまう。

どうしてもBの未知を読む能力が求められることになる。これは、前の再認ちがと違って、下敷したじきになるものがない。新しい世界に直面する。多少とも了解りようかい不能の部分があるはずである。その溝みぞを飛びこえるには、想像力によるほかはない。② いくらAの読みに習熟していても、それだけではBの読み方ができるとはかぎらない。両者は質的に違う。

読書が人間にとって未知の世界への導入となりうるのは、Bの読みができるからである。その意味でたいへん重要なものであるのに、一般いっぱんにAとBとの区別がはっきりしていない。

(I) AからBへの移行はどれだけできるのか考えられることはまれである。③ しばしば、Aだけにとどまって、それを読書のすべてであるように錯覚さつかくしてしまう。

Aの読みは、知る、という活動であるが、Bはただ、はじめから知るといふわけにはいかない。まず、かいしやく「解釈」が必要である。ことばを手がかりに、未知の世界へわけ入って行く。それで何とかわかれば、未知を既知とすることができるのである。

(II) 、「そういう解釈を拒こぼむような理解の難しい表現もある。これがCの読みになる。どうしてわかるのか。体当りである。一度や二度ではわかるわけがない。何度でもぶつかって行く。やがて、すこしずつだが、おぼろ気にわかってくる。読書ひゃっぺん百遍、

意おのずから通ず、というのが、このCの読み方である。おそらくそれはその人の考えによく色どられていいると思われる。

かつては、漢文の素読(注)ということをした。ただ、音声化だけを教えて、意味には触れない。幼いこどもにとって、完全な未知である。それをわかっていくのは、Bの理解というよりはCの理解に近い。禅僧が、公案を与えられて、長い間それをめぐって考えに考え抜き、ついには悟りに到達する。漢文の素読のねらいもいくらかそれに似たところがある。

いまは読者に親切なる表現がよく求められることもあって、Cの読みに耐えるような本はほとんどなくなってしまっている。読む人が自分の想像力、直観力、知識などをその限界まで総動員して、ついには、自分の解釈に至るといような思考的読書はきわめてすくなくなつた。

読書の必要を訴える声はしばしば耳にするけれども、多くそれは「X」的読書である。質的に見れば、ただ知るだけのAの読み、既知の延長線上の未知を解釈するBの読み、さらにまったくの未知に挑むCの読みという三つは、はっきり別のものである。

これからさき、CをBの中へふくめて、未知を読むのと既知を読むのとの二つを区別して考えたい。

学校教育の読みはAから始まる。学習者のよく知っている内容のことばの読みを教える。既知についての読みである。この方法については現在だれも疑うものがないけれども、昔は、一足飛びに高度の未知を読ませる素読を課していたのを考えると、Aから始めるのが唯一の方法とは言えないことがわかる。

文字を読めるようにするのが、Aの読みである。④これがなかなか骨であるから、一応、既知が読めるようにするのも長い訓練を要する。そのために、ついBの読みのあることを忘れてしまう。お互いの受けたことばの教育をふりかえってみても、どこまでがAであり、どこからがBであるのか、はつきりしていない。

いつのまにかBの読みをしようとしていたのであるが、いつ、いかにして、AからBへの移行が行なわれたのか、明確ではない。それもそのはずである。教授者自身もそれがあいまいになっていて、いっこうに平気である。

A読みをしていたのが、突如としてB読みのできるようになるわけがない。移行の橋わたしがなくてはならない。それに役立つのが文学作品である。⑤国語教育において、文学作品の読解が不可欠な理由がそこにある。

物語、小説などは、一見して、読者に親しみやすい姿をしている。いかにもA読みでわかるような気がする。あまり難解であ

るといふ感じも与えない。(Ⅲ) 創作がA読みだけですべてがわかるか、というところではない。作者の考えているのは、読者の知らないものであることがうすうす察知される。このとき、読者は既知に助けられ、想像力によって、既知の延長線上に「a」をおぼろげにとらえる。こういうわけで、同じ表現が、Aで読まれるとともに、Bでも読まれることが可能になる。創作が独得のふくみを感じさせるのは、この二重読みと無関係ではあるまい。

実際には、(Ⅳ)、このように簡単にAからBへの移行が行なわれてはいない。きわめて多くの読みの指導が、B読みを可能にしないまま、浅い意味での文学読者を育てるに終わってしまっているのである。

これはただ、言語教育の上で遺憾(注2)であるばかりではない。ひろく、われわれの思考、知的活動に大きな影響を及ぼしているのである。^⑥おもしろい文章というのが、ほとんどストーリーのあるものという日本の傾向は、抽象的理解力のひよわさと表裏をなしている。どうしてもゴシップ的興味がはんらんする。

文学作品が、Aの読みからBの読みへ移るのに欠かすことができないのは、前述のとおりであるけれども、読みは創作の理解が終点であっては困る。本当にBの読みができるようにするのが最終目標でなくてはならない。

それには、文学作品を情緒的(注3)にわかったとして満足してはならず、^⑦「解釈」によって、どこまで既知の延長線上の未知がわかるものか。そのさきに、想像力と直観の飛翔(注4)によってのみとらえられる発見の意味があるのか。こういうことがしっかりと考えられていなくてはならない。

それは国語教育、読書指導にのみ委ねておくべきことではない。未知を知る方法がすべての知的活動の前提であるとすれば、広く思考と知識に関心をいだく人たちにとって大きな問題でなくてはならない。

母国語においては、既知と未知の境界がはっきりしかねる場合がすくなくない。Aの読みがBの読みと Y 的に異なることすら明瞭(注5)になっていないのはそのためもある。

外国語の理解においては、母国語に比べると、はるかに、Bの読みの部分が多くなる。未知の理解にとって、外国語の古典の読書が有効であるのは偶然ではあるまい。日本における漢文の素読は乱暴のようであるが、一挙にC読みの本丸(注6)に突入するような試みで、実際に、すぐれた未知を読む読者を育成したと考えられる。

西欧諸国においてわが漢学に当るものを求むれば、ギリシャ・ローマの古典がある。中世以来、長く学校教育の中で中枢(注7)の位

⑧ 置におかれていたことも漢学に通じるところがあり、偶然ではあるまい。
それが言語教育にとどまらず、人間教育、知的訓練とほとんど等価なものでありえたことを、現代の人間は改めて考えてみるべきであろう。

(外山滋比古『思考の整理学』より)

※出題の都合上、表記のしかたを変えたり省略したりしたところがあります。

(注1) 漢文の素読……古代中国で書かれた漢字による文章を、意味を考えないでただ文字だけ音読すること。

(注2) 遺憾……思い通りでなく残念なこと。

問一 — 線① 「これ」とは何を指していますか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 三種類の知的活動のこと
- イ 既知のことを再認すること
- ウ 未知のことを理解すること
- エ まったく新しい世界に挑戦すること

問二 — 線② 「いくらAの読みに習熟していても、それだけではBの読み方ができるとはかぎらない」とありますが、筆者はBの読みをするときには、何をすることが必要だと述べていますか。最も適当な語を本文中から探し、二字で抜き出して答えなさい。

問三 — 線③ 「しばしば、Aだけにとどまって、それを読書のすべてであるように錯覚してしまう」とありますが、筆者はなぜAの読みだけではいけないと考えているのですか。その理由となる部分を本文中から探し、「から」に続く形で二十字以内で抜き出して答えなさい。

問四 空欄（ I ）（ IV ）に当てはまる語として最も適当なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号をくり返し用いてはなりません。

- ア しかし イ さらに ウ したがって エ それでは

問五 空欄

X

 ・

Y

 には対になる言葉が入ります。それぞれ漢字一字で答えなさい。

問六 — 線④「これがなかなか骨である」とありますが、どういう意味ですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 内容は以前から分かっていることについてであったとしても、その中に出てくる文字の読み方や用法を正しく理解することがA読みの骨格をなしているということ。
- イ 経験などからもともと知っている内容について書かれた文章であっても、その経験と関係づけて意味をとらえ内容を認識できるようにするのは簡単ではないということ。
- ウ 学校教育ではB読みがあることを意識していないために、A読みの段階で文字を正しく読めるようになるまでに時間や労力を割きすぎてしまうということ。
- エ 既に分かっている内容についての文章を用いることでひらがなや漢字をきちんと覚えさせ、文章をすらすら目で追えるようにするのが非常に重要であるということ。

問七 — 線⑤「国語教育において、文学作品の読解が不可欠な理由がそこにある」とありますが、筆者はなぜ文学作品の読解を不可欠だと考えているのですか。文学作品の読みについて触れながら、四十字以上六十字以内で説明しなさい。

問八 空欄「 a 」に入る語として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 新しい世界 イ 読書の楽しさ ウ これまでの経験 エ 作者の気持ち

問九 — 線⑥ 「おもしろい文章というのが、ほとんどストーリーのあるものという日本の傾向は、抽象的^{ちゅうしょう}理解力^{けいりき}のひよわさと表裏^{ひょうり}をなしている」とありますが、このような傾向を生んでいる日本の読書指導の問題点はどのようなものだと筆者は考えていますか。それを説明した次の文の空欄に当てはまる言葉を本文中の言葉を用いて答えなさい。

現在の多くの読書指導では、(A 五字程度) 読みの力をつけさせられず、(B 十字以上十五字以内) ような文学読者しか育成できていない点。

問十 — 線⑦ 「想像力と直観^{ひしやう}の飛翔^{ひしやう}によってのみとらえられる発見」とありますが、このような発見を可能にする読みについて説明した部分を六十字以内で本文中から探し、初めと終わりの五字を抜き出して答えなさい。

問十一 — 線⑧ 「それが言語教育にとどまらず、人間教育、知的訓練とほとんど等価なものでありえた」とありますが、(1) 「それ」とは何を指していますか。本文中から十字以内で抜き出して答えなさい。

(2) 筆者がその理由として考えている部分を本文中から「から」に続く形で探し、二十字以上二十五字以内で抜き出して答えなさい。

三次の——線部のカタカナを正しい漢字に直しなさい。

- | | | | |
|---|-----------------|----|-----------------------------------|
| 1 | リンキの処置が重要だ。 | 2 | 思ったことをタントウチヨクニユウに投げつける。 |
| 3 | 女性にもフセイが宿っている。 | 4 | 青白いハツコウの中に包まれる。 |
| 5 | いいレンチュウに囲まれる。 | 6 | トクサンブツがずらりと並ぶ。 |
| 7 | うそやサクリヤクのおいがする。 | 8 | シラハの矢が立つ。 |
| 9 | 表のオウライに人が立っている。 | 10 | 荒天 <small>こうてん</small> で漁船がナンパする。 |

令和三年度入学試験

二月一日(午前)

実施

東京女学館中学校

国語解答用紙

(字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。)



一問一 問二 問三(1) (2) 問四

問五 (1) (2)

問六 問七 問八 問九 問十

問十一 妹が ように。

問十二

問十三 (1) (2) (1) (2)

問十四ア イ ウ エ オ

二問一 問二

問三

問四 I II III IV 問五 X Y 問六

問七 問八

問九 A B

問十 から。

問十一 (1) (2)

問十二

問十三

問十四ア イ ウ エ オ

二問一 問二

問三

問四 I II III IV 問五 X Y 問六

問七 問八

問九 A B

問十 から。

問十一 (1) (2)

問十二

問十三 (1) (2)

問十四ア イ ウ エ オ

評点

三

9	5	1
10	6	2
7	3	
8	4	



受験番号

氏名